

Title	ドイツのヤポニクムにおける日本語集中講座の紹介：オンライン授業への変更の経験を通じて
Sub Title	
Author	Steffen, Franziska
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2022
Jtitle	日本語と日本語教育 No.50 (2022. 3) ,p.77- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	刊行50周年 特集：修了生の現在 〔日本語教育の現場から〕 2
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20220300-0077">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20220300-0077</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ドイツのヤポニクムにおける 日本語集中講座の紹介

ーオンライン授業への変更の経験を通じてー

**Franziska Steffen**（フランツィスカ シュテッフェン）

## 1. はじめに

日本文化に興味を持ち、日本に派遣されることを希望する人、また留学を目的に日本語学習をしたいと考える人など、ドイツ人が日本語学習を行う動機が多様化してきている。短期間で「使える日本語」を学びたい学習者に向けて、ドイツのヤポニクム（Japonicum、以下 JPC）ではコミュニケーション能力を重視した集中講座が開講されている。

本稿では、筆者が2020年8月に常勤講師に就任したヤポニクムの日本語集中講座を紹介したい。特に、筆者の就任時期はコロナの感染拡大の時期と重なる。コロナ禍下での対応として導入したオンライン授業の経験を振り返ってみる。

まず、JPCの概要を紹介し、受講者、講師、教材開発に言及して、コロナ禍下での対応について述べる。次に、通常の教室で行われる対面授業（対面コース）とオンライン集中講座（オンライン授業）の構成を比較しながら詳しく紹介する。さらに、コミュニケーション能力を重視するJPCの対面コースにおける教授法に照らしながら、オンライン授業の可能性に関する考察を加える。最後に、新任の常勤講師としての課題を述べる。

## 2. ヤポニクムの概要

ヤポニクム (JPC) というのは 1981 年にボーフム・ルール大学外国語教育研究所 (Landesspracheninstitut、以下 LSI) に設立された外国語能力・異文化間能力の専門教育を目的とした日本語学科である。LSI は、文法訳読法に代わってコミュニケーション能力の養成に重点を置く外国語教育機関として 1973 年に開校され、2007 年からルール大学の附属機関となった。現在は日本語以外に、ロシア語、アラビア語、ペルシャ語、中国語、韓国語、そして外国語としてのドイツ語 (DaF) も提供している。

デジタル時代以前に設置された JPC は、もともとは日本派遣のビジネスマンや日本留学を予定する大学生を対象者と考えていたが、実際のところ中等教育の生徒から引退後の世代まで、趣味として日本語を学ぶ多くの学習者が受講している。

JPC の日本語集中講座は、五つのコースから成り立ち、各コースは、月曜から金曜まで全日の授業が 2 週間継続して行われる。初級レベルは『日本語 1・2』、中級レベルは『日本語 3・4』の、それぞれ二つのコースからなる。文法項目に限って言えば、中級までで日本語能力試験の 4 級にほぼ相当する。さらに、上級コースも一つある。開講される五つのコースには、教員全員が関わり、現時点では日本語母語話者が二人 (そのうち一人は客員講師) で、筆者を含めドイツ語母語話者の二人も授業を担当している。

LSI は、常に最新の勉強方法など、語学の趨勢を取り入れた教材開発を課題にしているため、独自の教科書や文法書、かな学習プログラムや漢字カードのみならず、2015 年から LSI Online という独自の E ラーニングプラットフォームの開発も始めている。現時点では教科書に沿った聴解・読解練習、語彙練習、文法練習、漢字学習などが提供されているが、LSI で学ぶ内容の予習や復習に加え、独習者による使用も想定している。

JPC には上級コースが一つしかないので、現在ルール大学と MERCUR 財団の協力で Hybrid East Asian Language Learning Project が推進されてお

り、超上級学習者を対象にした読解・テキスト理解コースの設置を計画中である。

### 3. コロナ禍の挑戦

周知の通り、今も続いているコロナ禍は世界中の教育業界に大きな影響を及ぼしている。LSIは2020年3月から新型コロナウイルス感染対策を実施し、対面コースの禁止とリモートワークの指示を出した。4月下旬からは、五つの2週間の集中講座はウェブ会議システムZoomを使ったオンライン授業という形で開講された。そして、2020年6月からは、オンライン形式のみで開講する、新しい夜間の10週講座が設けられた。さらに、ハイフレックス型授業が実践できるように、教室には遠隔授業システムが設置され、そのおかげで8月あたりから年末までの間は、対面コースにオンライン受講者も参加できるハイフレックス型授業が可能となった。しかし、2021年度はハイフレックス型で進めたいという希望は叶わず、一年間はフルオンライン授業のままで終わってしまった。

以下、筆者が関わった2週間集中講座とそのオンライン形式のコースを比較して紹介したい。

### 4. 対面授業としての集中講座の構成

上記の通り、JPCは、短期間で「使える日本語」を身につけられることを目的とする。そのために、初級の最初のレベルである日本語1が始まるまでにひらがな自習という予習課題がある。それから受講者は、二週間、月曜から金曜までの全日日程で、対面授業が約80コマ（1コマは45分）行われ、授業後には自習として約20時間勉強する。そのような要求度の高い講座を成功させるためには、主に二つの対策がある。一つは、楽しい勉強空間を作ることで、もう一つは集中力の維持を促す効果的なコースデザインを作ることである。

対面コース		オンラインコース	
時間	授業内容	時間	授業内容
8:30-12:00 (30分休憩)	授業 (教科書使用、文法項目)	8:30-11:15 (15分休憩)	授業 (教科書使用、文法項目)
		11:15-12:15	オンライン自習 (練習・復習)
12:00-14:00	昼休み	12:15-14:00	昼休み
14:00-15:00	シチュエーション (会話のパターン練習) TPR	14:00-14:45	シチュエーション (会話のパターン練習) 可能な限り TPR
15:00-15:30	漢字	14:45-15:15	漢字
15:30-16:00	文法まとめ	15:15-15:45 (5分休憩)	文法まとめ
16:00-17:00 (15分休憩)	練習・質問時間	15:45-16:15 (3回のみ)	練習・質問時間
17:00-17:15	瞑想時間	15:45/ 16:15-16:45	自習時間

図1 JPCの集中講座、初級レベル、日本語1 (Japanisch 1) の例

学習に集中できる環境が必要とみなされ、LSIの施設内には教室のほか、寮と食堂もある。受講者は2週間、寝食をともにしながら、楽しく一緒に勉強し、まるで留学したかのような非日常的空間を体験することが可能になる。それに、コース定員は4人～12人程度で小規模である。

言うまでもないが、一日中勉強することは受講者にとっても挑戦で、コースデザインはこれを考慮したうえで作られる。五つのコースにはそれぞれ多少違うところもあるが、以下に、例として、初級レベルの『日本語1』(Japanisch 1)の午前と午後の授業の流れを説明する(図1参照)。

午前中は文法項目の導入を含めた教科書の内容に沿った授業を行う。JPCの教科書のストーリー(日本へ研修に行く予定があるドイツ人銀行員

が中心)に沿って大量のインプットを行う。全てを理解することを求めず、インフォメーションギャップに耐えてもらいながら分かった部分に注目することが主眼となる。テキストを聞き取った上で、主に直接法で文法項目を導入しているが、練習後にはドイツ語で説明を入れる。

午後の授業は午前中に勉強した内容の整理・練習・応用・確認に専念する。受講者は集中力が最後まで保てるように、アクティブとパッシブの項目を交互に入れる。また、応用能力が問われる課題で始め、徐々に活用練習などで負担を軽くする策もある。教授法は6.で詳しく扱う。

## 5. オンライン授業としての集中講座の構成

オンライン講座の開発にあたって一番重要な点は、対面コースとの両立性を保つことであった。受講者は自分のコースを五つのコースの中から選ぶのであるが、2週間の対面コースを修了した受講者が次にオンラインの10週間コースを選んでも、オンライン2週間コースを選んでも、途切れることなく勉強が続けられるように講座を設置する必要があるのは当然のことであった。紙幅の都合から、以下ではオンライン2週間コースに絞って述べる。10週間コースについては次の機会に紹介したい。

講座の枠組は基本的に変更することはできないので、オンライン講座も、それぞれ月曜から金曜までの全日日程での2週間コースである。受講者数も最低4人から最大13人までと同じである。しかし、肝要なのは、LSIの特徴である「きつい集中コースでも最後まで楽しく勉強できる」授業をオンライン授業の形で実現することであった。なぜかという、集中コースで最も重要な問題点は受講者の集中力の維持にあると言えるからである。受講者は、合宿の環境が与えられず、自分のいつもの日常に身を置かれたまま実行するオンライン授業において、集中力の維持に問題が起きるのは当然であろう。

授業のコースデザインに関して言えば、より簡単な対策は対面授業と自

習授業の調整である。図1からわかるように、オンライン授業では、Zoomでの対面授業時間は80コマから60コマに縮小され、残りの20コマは自習時間に変更されている。学習内容は変わっていないため、それは、つまりグループで他の受講生と一緒に練習する時間が短くなっていることを意味している。言うまでもないが、受講生同士と一緒に勉強する時間を短縮することは勉強の楽しさやグループとしての一体感が生まれにくい状況になる方策でもある。それらの問題解決には、JPCのコミュニケーション技能を重視した教授法が助けになると思われる。そこで、続いてJPCの対面コースとオンライン授業でそれぞれ使われている教授法を比較して述べる。

## 6. JPCの対面コースとオンライン授業における教授法

繰り返しになるが、対面授業形式でもオンライン授業形式でも、JPCはコミュニケーション能力を重視している。上記4.に述べたように、午前の授業は教科書のストーリーに沿って聴解による理解を重んじ、耳から覚える方法を使っている。読解コースではないため、講師は受講者の興味を引くように会話を熱心に音読し、会話者の熱演にも最大の努力を払う。理解を促すために、少しずつ語彙を導入し、文法項目について直接法に近いやり方で説明を加える。非常に限られた時間の中、圧倒的な情報量のもとではあるが、応用練習も試みる。それでも授業を楽しく進められるように、ペアワークはもちろん、サジェストベディア風の活動も取り入れる。例えば、体操やジェスチャー、ダンスと結びつけて、語彙・文法を導入したりゲームで復習をしたりするなど、体を動かす方法を使う。

オンライン授業の場合、上記の教授法をなるべく再現しようと思うと、講師の元気な演技や体操能力が問われる。Zoom自体の制限もあり、一緒に歌ったり、画面の前で全身を動かす活動は難しいものの、そのような活動自体は効率的に使える教授法であると思われる。そのほかにも問題はあ

る。Zoom では、受講生は順番に 1 人ずつしか答えられないという技術的な理由によるタイムロスの問題、長時間、画面を見続けることによる眼精疲労からくる注意力散漫の問題が生じやすい。そのため、練習や復習の大部分は LSI Online を使った自習時間に移してある。

このような問題があることから、LSI Online の可能性が注目される。対面コースの場合でも、筆記の宿題の代わりに LSI Online で復習と予習をしてもらう設定になっている。対面コースの場合、LSI Online は主としてコース終了後の復習に使われているが、オンライン授業の場合は、毎日使うことが予定される。受講生には、授業での教授法と同様、読解から始めるのではなく、音声ファイルを聞いて内容理解問題を解いてから読解を行う学習方法を奨励している。

次に、午後の授業について説明する。対面コースの場合、昼休み終了後はまず教室内で動き、好奇心を喚起するアクティブな活動をする。毎日初見の表現を覚えるのは大変なので、全身反応教授法 (Total Physical Response、以下 TPR) で翌日導入する項目等を説明せずに聞かせ、参加者同士が協力し教室内ものを探したり選んだり、パントマイムで見せたりし合う方法である。残念なことに、TPR はオンラインで行うことは難しい。しかし、受講者を指示に従って動かしたり、教師が描写して、近くにあるものを取ったりしてもらうことはできる。

続いて、午前中に勉強した内容に適したシチュエーション練習に入る。例えば、レストラン訪問、道案内などに必要な基本会話パターンの口頭練習をしてから、ある初めての状況を設定して、日本語で対応してみるという会話練習をさせる。その際、特殊音などの発音指導にジェスチャーを取り入れたヴェルボ・トナル法 (Verbo-Tonal Method) を使うのも、聴解・記憶力を促す効果があると思われる。教室では、受講者が自由にお互いに話しかけ、何度も同じ会話を繰り返すという活動を行うが、オンライン授業でも Zoom のブレイクアウトルーム機能を効率的に使うことができる。



次に、気分転換のために、落ち着いて行う漢字の勉強が設けてある。読解は授業の重点ではないので、漢字の積極的な勉強を受講生に要求するというより、むしろ漢字に対して関心をもってもらえるように、少数の漢字をイラストにしたり、ストーリーを使って連想しやすい形で説明したりするなどして紹介し、書き順を指で空書きして漢字の成り立ちを理解してもらう方針である。オンラインでもデジタルペンを使うことで同じ教え方は問題なくできる。

その後は新出の学習項目は導入しない。ドイツ語で説明されている文法のまとめをした後は、さらに続けてゲーム的な要素を含んだ練習を入れる場合もあるし、自由に質問できる時間を設ける日もある。対面コースの場合は、授業が午後5時ごろ終了した後は、瞑想時間のように、受講者に音楽を聞かせながら自然に関するテキストを日独語で交互に聞かせて一日の学習を終わらせる。オンラインコースの場合は、授業は午後4時ごろに終わるが、質問と瞑想時間は省略する必要がある。

## 7. 新任の常勤講師としてのJPCの教授法に関する考察

既に述べたように、JPCは「きつい集中コースでも最後まで楽しく勉強できる」講座の提供を目指している。そこで、オンライン授業の設置にあたり、二つの問題を解決することが重要な課題であった。一つは日常の中で集中力を失い、一日中画面を見つめる受講者の苦勞に対応することで、もう一つは双方向授業ならではの活気やグループ感を作ることで楽しい勉強空間を実現することである。

一つ目の問題は、講座の構成によって対応ができていられると思われる。対面授業の短縮で延長された自習時間を活かし、受講者の個人的な状況に配慮して対応することができる。それに、ずっと座り続けている苦痛を癒せるように、2時間ぐらいの長い昼休みをそのまま維持していることも役に立っている。今までのところ、対面での練習時間が短縮されたにもかかわらず

らず、受講生の到達水準は落ちていないと言える。

対面コースと変わらず、集中力を維持するために、JPC の多様な教授法はオンライン授業でも効率的に使えると思われる。アクティブ項目とパッシブ項目を適宜交換することは気分転換によく、体を動かす活動は楽しい学習方法でもある。技術の面で音声接続が途切れたり、様々な問題が生じても、あえて一緒に歌う活動は、時に画像的にはおかしく映ったり、ダンスも各受講生の居住状況によって邪魔が入ったり失敗したりするが、そのような場合でも受講者はそれをかえって快く受け入れた様子が見て取れた。

受講生同士がお互いに恥ずかしく思いながらも体操したり歌ったり、また、ブレイクアウトルームを使って講師がいないところでペアーワークで課題を解いたりするなど、一緒に活動することを通じて、グループ感を養うことも可能になる。そこには講師の積極的な創意工夫が強く求められることを痛感した。たわいないおしゃべりであるスモールトークや、昼休みの間にも Zoom 会議を終了せず自由に話す許可を与える可能性などついて、これからもっと考えていきたい。

対面コースの再開は 2022 年度に期待される。その時に LSI Online を効率的に使用し、同じ内容を相対的に短い時間で扱ったオンライン授業の経験を、今度は対面コースでどのように生かせるかを JPC のチームでともに考えていきたいと思う。

**経歴**

フランツィスカ・シュテッフェン (Franziska Steffen)

ドイツ (ライプツィヒ) 出身

2010年9月 マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク大学日本学科／メディア・コミュニケーション学科卒業

2012年10月 マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク大学大学院日本学研究科修士課程、慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程 (ダブルディグリー・プログラム) 修了

2012年11月 マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク大学大学院日本学研究科博士課程入学

2014年4月-2015年1月 マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク大学日本学科 非常勤職員 (研究員)

2016年4月-2020年7月 マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク大学日本学科 非常勤講師

2020年8月 ボーフム・ルール大学外国語教育研究所 常勤講師就任

現在に至る